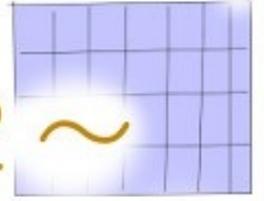


ゆりかごの歌

～幼竜の目覚め2～

12



気がつくと、ビビはふかふかの毛布にくるまれていた。木材で編まれた籠の中で、ゆっくりと目を覚ます。

まったく見覚えのない場所だった。木でできた台のようなものや、柔らかいとても大きな布のようなものはあるが、草や木は1本も生えていなかった。

『なんなの...ここ...』

ビビは籠の中から這い出ると、ふかふかの布の上に立った。

世界にはこんなところもあるのか。

すべてが自分の知っているものとは違い、異質な空間のようだった。ビビがきょろきょろと周りを見渡していると、目の前にある巨大な板が微かな音を立てて開いた。

『きゃあああっ！』

驚いて飛び退くと、板の向こうからも同じような悲鳴が聞こえた。

『うわあああっ！』

続けて別な声が悲鳴の主と言う。

『びっくりしたあ。口口、大丈夫？』

ビビはこれから何が起ころうとしているのかわからず、慌てて籠の中に潜り込み、様子を伺った。板の向こうの悲鳴の主はしばらく躊躇していたようだが、やがて怖々と顔を覗かせた。

『あ...！あなたたちは...！？』

ビビは目を丸くした。そこにいたのは、自分と同じような幼竜たちだったのだ。マールンではないものの、同じ年頃の竜との出会いにビビは胸を撫で下ろした。

『あなたたち...わたちと同じ、竜だよな？』

ビビはつぶらな瞳を幼竜たちに向ける。すると、褐色の毛色を持つ、うさぎのような竜が元気に板を押し開けた。背中にはビビより小さな翼が生えている。褐色の幼竜は怖がる様子もなくビビに寄ってきた。

『うん、僕たちも君と同じ、竜の一族だよ。みんなここで暮らしてるんだ。僕は口口』

ビビは呆気にとられて口口を見つめた。ビビより少し体の大きい口口は、しっかり者のお兄さんのように見えた。

『わ、わたちはビビ。あの...ちょっと聞きたいことがあるんだけど...』

『うん？』

口口は小動物のようにかわいらしく首を傾げた。

『わたしのパパとママ知らない？口口は何か見なかった？』

口口は途端に黙りこんだ。

板の向こうからさらに数頭の幼竜が顔を出しビビに寄るが、誰も何も言わない。

『僕たちが見たときは、ビビのお父さんとお母さんはもういなかったよ』

『そう...』

重苦しい空気が漂う。

自分はなぜここにいるのか。

聞きたいことはいろいろあったが、ビビがその小さな胸のうちを整理する前に、口口が口を開いた。

『寂しいと思うけど、これから仲良く暮らそうよ。僕たちもみんな同じだから』

『同じって...』

『私もお父さんとお母さんがいないの』

ビビの半分ほどしか体長がないような幼竜が歩み出た。ふさふさの真っ白い毛が、まるで妖精のようだった。

『私はワフル。よろしくね』

『うん...。もしかして、みんなパパやママがいないの？』

『ええ。私のお母さんは病気で死んじゃったの。お父さんはどこにいるかわかんないし』

『え！？どうしてパパがどこにいるかわかんないの？』

『どうしてって...ビビちゃんわかるの？』

『うん。だってパパと一緒に暮らしてれば大体どこにいるかわかるじゃない』

幼竜たちは一斉に驚きの声をあげた。

『えー！？お父さんと一緒に暮らしてたの！？』

父親も子育てに参加するのはマールンをはじめ、ごくわずかな竜だけだった。しかし、そんなことを幼竜たちもビビも知るはずもなく、ただただお互いの家族のあり方を珍しがった。

『ビビ、お父さんとお母さんを探したいなら、ペアさんも手伝ってくれるかもしれないよ。頼んでみようよ』

口口はにっこりと微笑んだ。

『ペアさんって？』

『すごく優しくて、しかも物知りなんだよ！』

そのとき、幼竜たちが入ってきた板がさらに大きく開き、2本足の生き物が入ってきた。

そこにいたのは、ビビの父親と母親を襲ったのと、同じ生き物だった。

『いやあああああっ！』

ビビは一目散に籠の中に逃げ込んだ。

『ビビ！どうしたの！？』

口口は真ん丸な目をさらに丸くしてビビを見た。

他の幼竜たちも心配そうに歩み寄るが、ビビは毛布にくるまったまま震えている。2本足の生き物は穏やかな声で鳴いてみせるが、ビビには偽りの優しさにしか聞こえなかった。

『ビビ、大丈夫だよ。出ておいでよ』

ワフルがそっと毛布を覗き込むと、ビビは怯えた声で言った。

『パパとママはあの2本足の生き物に襲われたの...！ワフルはあいつの仲間なの！？』

ワフルは顔をあげると、悲しそうな目で口口を見た。

口口も一瞬悲壮な表情を浮かべたが、すぐに優しい笑顔になると、ビビに近づいた。

『ビビ、怖がらなくていいんだよ。あの人は人間だけどすごく優しいんだ』

それでもビビは毛布から少しも出ようとせずに、声を振り絞った。

『あ、あれが人間なの？マーラ・ビビのお話に出てくる人間とは全然違うわ』

『お話はお話だよ。ビビのお父さんとお母さんを襲ったのは人間かもしれないけど、ペアさんは悪い人間じゃないんだよ』

『口口の言うことなんか信用できないよ！』

ついにビビは取り乱して怒鳴りつけた。

『私たち、あなたたち全員信用できない！みんな嫌い！出てってよ！』

『ビビ、落ち着いて。怖くないからね』

『みんなが出て行かないなら、わたちが出て行くわ！』

ビビはそう言うと突然籠の中から飛び出し、四角い枠から見える外へ向かってかけだそうとした。しかし、その枠には透明な板がはめ込まれていたのだ。

『危ない！』

口口が叫んだが間に合わず、ビビは頭から透明な板に激突すると、黄色い鞠のように跳ね返り、そのまま動かなくなってしまった。